



始



特 241

192

上雅二氏述

半島を訪ねて

|| 先人の偉烈を想ふ ||

中央朝鮮協會

3

特241  
192

はしがき

本冊子は本年五月二日本會に於ける會員井上雅二氏の講演の筆記である。井上氏は足跡世界に洽ぬき國際人で、我國の拓地殖民事業に深き關係を有する先覺者たる事は改めて紹介するまでもないが、氏の朝鮮との因縁は古く明治三十六年秋獨逸留學より歸朝間もなく逓信省囑託東亞同文書院特派員として渡韓の時に遡り、同三十八年には韓國政府財政顧問附財務官として目賀田願問の施設を輔け、同四十年韓國宮内府一等書記官として宮内府事務の改革刷新の衝に當り、同四十三年春退官の時まで誠意韓國宮廷の爲奉公盡瘁せられたのである。本講演は當時の懷舊談であつて、昔の朝鮮を知る人に對しては思出をそゝる好話柄であり、昔の朝鮮に詳かならぬ人にとりては好個の參考たるべきを信ずる。

昭和十三年六月

中央朝鮮協會



# 半島を訪ねて

|| 先人の偉烈を想ふ ||

井上 雅二氏述

—

只今御紹介に預りました井上であります。只今御紹介の御言葉中にもありましたやうに、私は、此の度僅か二週間の短い朝鮮の旅でありましたが、朝鮮各地を方々歩いて参りました。それで實は何か朝鮮の話をといふ御註文でありますけれども、朝鮮の事に付ては話をする私よりも、お聴きになつて居られる皆様の方がズツトお詳しい譯でありますから、別に是と言つて取立てゝ申上げることはいせぬが、併し折角のお集りでもございますので、只今から約一時間餘りの時間内に於きまして、私の此の度の旅行中での見た儘、聞いた儘を断片的に御話申上げて見たいと存じます。尙ほ其の前に今日の御話の骨子は朝鮮の古い話といふ御註文のや

—

うであります。さういふことになりますと、勢ひどうしても伊藤、目賀田といふやうな先輩の方々の話にまで及ぶ譯であります。實は目賀田さんの事などは、私などよりも御集りの皆様の方が遙かにお詳しい、又、長く一緒に居られた御方もおゐでのやうでありますから、餘り諄々しいことは申し上げませぬ。唯、茲に伊藤公、目賀田男、此の兩先輩を中心としての私の關係致しました事柄を織込んで、所謂懷舊談といつたやうな積りで、暫く皆様の御清聴を煩はしたいと思ふのであります。

實は此の度朝鮮へ参りまして放送をさせられたのであります。其の放送の中に於て私と朝鮮との因縁に付て申述べ、更に又總督府に於ても、君は何故に朝鮮に縁故を有つて居るのか、又縁故を有つやうになつたのであるか、さういつたやうな事に付て話をして貰ひたい、斯ういふ御注文でありましたので、總督府のお役人達にもさういふ話をした譯であります。私と朝鮮との因縁は、要するに亞細亞を興すといふ考へに出發して居るのであります。昨今は斯ういふ言葉が一種の流行語のやうになつて居りますが、要するに亞細亞を興すといふ志から出發して居る。そこで然らば何故さういふ考へを起すに至つたのであるか、斯ういふことに付て少し

く前提として申上げる必要があらうかと存じます。

## 二

私が初めて朝鮮の土地を踏みましたのは明治三十年であります。其の前に御承知の日清戦争なるものが起りました。當時海軍兵學校に居りました私は、頻りに從軍を願ひました所が、まだ學生の身分であつたものですから、どうしても許されなかつた。そこでそれでは學校を罷めても支那に往こうといふので、荒尾精といふ人——申し遅れましたが、此の人の名は最近大分世間に出て來まして、昨今私の所へも荒尾先生は、大陸經營の先驅者であつたのだから、あの人等に對して何か慰靈の方法でも考へたらどうかと言つて來る者もございまして、私の關係して居ります東亞同文會で、荒尾先生初め先代の近衛公、根津先生其の他支那問題の爲に犠牲になつた人々の慰靈を行はうといふ計畫が進められ、實は今も其の話をして來たやうな譯であります。要するにさういふ譯で、荒尾といふ人がどうしても亞細亞を興すことに吾々は専心しなければいかん、君は海軍を罷めて支那へ行かうと言ふし、自分は陸軍を罷めて支那へ行つ

た、志は同じであるから一つ行動を共にしようではないか、斯ういふことになりました、兵學校を退いて間もなく京都に出て荒尾先生と一夕の心談——忽ち先生に傾倒しまして寢食を共にするようになり、此の荒尾先生から支那語を習つて、其の年の秋、臺灣に渡り、翌二十九年夏、始めて大陸に渡つたのであります。

そこで其の翌年即ち三十年に川上參謀次長が西比利亞へ行かれる際、一行に加はつて隨行することになり、その節に始めて朝鮮の土を踏んだのであります。其の時は西比利亞、樺太へ行くのが目的でありましたので、朝鮮は其の一角に觸れたに過ぎませぬ。それから其の翌年、即ち明治三十一年に私は東亞同文會の前身である東亞會といふ會の幹事をして居りまして、支那へ参りましたが、恰度伊藤公も北京に居られた時で所謂戊戌政變のあつた際で、其の歸りがけに朝鮮に立寄つたのであります。當時菊池謙讓君が、漢城新報に居られました、仁川から馬で京城に往復したことを憶えて居ります。無論當時は汽車はなかつたのであります。是が二回目の朝鮮通過で、第三回目は明治三十六年十月、即ち日露戦争前、獨逸の留學から西比利亞鐵道を経て歸る途中、朝鮮へ寄つた時であります。

歸朝間もなく、犬養毅先生からシヤムの顧問になつて貰ひたいといふことの交渉を受けました。恰度兒玉さんの總督時代で、臺灣總督府の囑託としてシヤムの支那人商業會議所顧問になることに内定して居つたのであります。無論之は内定でありましてそれには條件が付いて居りました。詰り日露が若し戦ふやうな事態に立至つたならば私はシヤムに行かない、朝鮮へ行かなければならぬ——と申しますのは、東亞同文會は明治三十一年秋に創立されましたが、其の綱領の第一は支那の保全であり、第二は朝鮮の改善助成であつて、詰り朝鮮庶政の改善を助ける、斯ういふことがあつたのであります。と申しますのは、其の當時支那のことを言ひ、朝鮮のことを言ふ人の中には熊本人が少くなかつた、此の席には熊本出身の方も居られるのであります。佐々友房氏の如き荒尾先生とも懇意であり、同文會創立の有力な發起人でありました。支那問題と共に朝鮮問題も相當に考慮されたのである。所が私は荒尾先生の門下に居つたものでありますから、吾々が先輩と共に東亞同文會を作るにしても、唯支那の保全だけではない、朝鮮の改善にも努力しなければならぬ。斯ういふことで以て、東亞同文會の第二目的と申しますか、綱領の第二に朝鮮の改善を助成するといふことが加へられた譯であります。そ

ここで先刻申上げましたやうに、日露戦争となつたらシヤムへは行かないといふ條件の内諾をしたが、其のうちに日露開戦といふことになりまして、私はシヤム行を断はり朝鮮へ行くことになつたのであります。之より先、私の朝鮮滞在中に兒玉臺灣總督が参謀次長になられたといふ情報を得まして愈々戦争になると思ひました。話の當初、犬養さんは、日露戦争はない、桂内閣は戦争をなし得ないといふやうなことを言つて居られました。流石の犬養さんも見當が少し違つたといふ譯であります。

斯様な次第で朝鮮へ行くことになつた譯であります。私が朝鮮へ参りますに付ては、先刻來申して居ります東亞同文會、此の會の特派員とでも申しますか、當時朝鮮にありました三つの日本語の學堂、是等の學堂に對して同文會が援助をして居つたので其等の學堂の後見といふことが一つと、更に今一つは同郷の先輩田健治郎男が當時遞信次官をして居られ、其の推輓で遞信省の囑託として戦時の特別任務を有つて朝鮮へ行くことになりました。即ち東亞同文會の特派員と遞信省の囑託、斯ういふことで朝鮮へ参りましたのが、明治三十七年の二月でありまして、明治四十三年の二月まで、前後七年間朝鮮の飯を食つた譯であります。其の後、昭和三

年に歐羅巴から歸りがけに朝鮮を通りましたが、偶々モスコイ滞在中、母の訃報に接し急遽歸朝の已むなきに至りましたので、朝鮮を素通りし、京城では驛頭で舊友に會つた位でありました。其の後昭和七年に滿洲移民調査の歸り途に朝鮮へ立寄つた譯であります。滿洲移民の調査にはどうしても間島を見なければならぬといふので、京城から咸北を通つて間島へ参りました。それが爲に相當の時日を費したものでありますから、餘り他方へは行けずに、滞鮮僅か二週間ばかりで内地へ歸つて來たのであります。今回も往復二週間の僅かな時日でありましたが京城には前後五日間、平壤、大邱に各一日、それから慶尙南北道の一部地方にも参りました。素通りと言へば素通りでありましたが、今度参りました際には豫め友人に手紙を出して、成るべく古い友達にも會ひたいといふことを傳へて置いたものでありますから、短時日であつた割合には、相當多くの人々と會ふ機會が得られた譯であります。

## 三

そこで今度の旅行の経過を一寸申上げて見ますと、去る三月二十九日の朝京城に著きまして

先づ朝鮮神宮に参拜し、總督府其の他を歴訪し、午後二時から京城日報主催の講演會に臨みました。其の晩は東拓、朝郵等の招待で御馳走になり、其の翌日は久し振りで李王職や軍司令部を御訪ねし、金谷陵等に詣りました。其の夕刻は放送をやり、夜は總督官邸の招待會に参り、翌三十一日は開城を経て平壤に行き、四月一日夜行で二日朝京城に引返しまして、更に二、三、四と三日京城に居ります間に總督始め多數の内鮮の方々に會つて御話を聞いたり、碧蹄館に戦跡を弔ふの機會も逸しませんでした。更に、舊友の篠田李王職長官の肝煎りで、閔丙奭子、尹德榮子其の他中樞院参議等多數の舊知と會談が出来ました。私の宮内府書記官時代の長官でありました李允用男は今年八十五歳、閔子は八十歳で尙ほ健在でありました。七十五歳の李謙濟君、七十歳の金寬鉉君等も久振りの會合を喜びました。

是等の古い人々二十餘名と實業界での朴榮詰、韓相龍兩君、それから思想方面での崔麟君や新進の有力者等にも會ひ、更に内地人側では先刻申上げた七十翁の菊池謙讓君を始め、彼此れ四十人近くの人々にも會ふことが出来ました。それから朝鮮の新進と一緒に歩きまして、各地で獨り内地人側でなく鮮人側の新舊有力者とも會ひ、本當の朝鮮らしい所も久し振りで味は

うことが出来、京城、開城、平壤到る處で純粹な朝鮮料理も食べさせて貰つたのであります。又家内と一緒に رفتたものでありますから、學校の方面も主として女學校であります。方々見せて貰ひ、僅か十日餘りの時日ではありましたが、私としては相當方々を見て歩くことが出来、其の結果として半島が最近有ゆる方面に益々發展進歩して行つて居ることを痛切に感ぜしめられたのであります。

私は二、三年前半島施政二十五週年記念の時に朝鮮新聞で何か感想を話して呉れといふことでありましたので、其の時に二十五年間に於ける半島の進歩は實に著しいものがあるといふことを話したことを憶えて居りますが、實際今日方々を歩いて見まして、つくづく所謂内鮮一家の實の擧りつゝあることを痛切に感じて参つたのであります。

皆さん御承知のやうに伊藤公は朝鮮に渡られた時に、韓山の草木をして青からしめんといふ詩を詠まれた。中々韓山の草木はまだ充分には青くなつて居ない、平安道邊りへ行つて見ますと、まだ中々禿山がございしますが、併し大體に於て吾々三十年前に居つた者から見ますならば餘程青くなつて居るといふ感じがするのであります。更に伊藤公は「扶桑權域一家の春」とい

ふことを諷はれて居りますが、是れ亦此處にお集りになつて居られます皆様方の御努力に俟つ所が多い譯であります、確にさういふ氣持になつて來て居るやうに思ふのであります。過去四十年に亘り私は世界の殖民地を幾度か歩いて見まして——勿論半島は彼等の所謂殖民地ではない、合邦である。隨て無論例を他に取ることは出来ませんが、兎に角一民族が他の民族を統御し綏撫した其の跡を見ましても、今日の内地と半島の關係のやうにしつくり行つて居る所は殆どない。それと申しますのも、要するに日鮮は同根同種である、一緒になるべくして一緒になつたのである、元々一緒であつたものが分れて居つて、それが復た一緒になつたものであると言つてよいのでありますから、抑も他に比較することは出来ないものであります、歴史も多少違ひ、土地も離れ、國名を別にして居つた日本と朝鮮が合併して、僅か三十年間に今日のやうな一心一如の状態になつたといふことは、全く他に類例の無いことである。内鮮の關係が類例ないと同様に、其の治績に於ても殆ど類例が無い、斯様に感ずるのであります。

之に付て想ひ起すのでありますが、それは伊藤公が統監として韓國に蒞まれて間もない頃、第一銀行支店長の市原盛宏さんの所で吾々財政顧問部や統監府の官吏を招いて園遊會をやつ

た。其の時に伊藤公が韓國顧問側の吾々に訓示をされたことがありました。何と言はたかと申しますと、『自分は陛下の名代として此地に蒞んで居るのであつて、日本の利益は自分が代表する、御前達は韓國側の官吏として一意韓國の爲を圖れ』斯様な意味のことを申されたのであります。さうして語を次で『實は東京出發に先だち、駐日マクドナルド英國大使が自分の所に來て、最近ロード・クロマーから手紙を寄越して、日本が韓國を保護國にしたといふことは非常な盛事で、東洋平和の爲に喜ぶ、併し之は容易ならぬことである、中々重大問題であるからして、どうか日本第一流の政治家がその開發に當らなければならぬ。自分は日本第一流の政治家と自負せぬ、併しながら世界各國が如何に韓國の經營に重きを置いて居るかといふことが分る。諸君も大に自重してやれ』といふことを言はれたことを憶えて居ります。

## 四

そこで話は一寸轉ずる譯であります、明治四十年御承知の通り日韓新協約の結果、韓人大臣の下に日本人が次官になり、所謂次官政治を布くこととなり、顧問政治より直接指導政治と



なつて韓國經營に一進轉を來たすこととなりまして、其の時迄手をつけなかつた宮中の改革に取掛かる事になつたのであります。そこで私も引張り出された譯であります。何故に伊藤公が私のやうな變り種を引張り出して大宮人の居る宮内府に入れといふことになつたのであらうか、其の事を今日回顧して見ますと、之も伊藤公を僥ふよすがとなるのでありますから、一寸申上げるのであります。當時の伊藤公と云へば迎も大した人で、相當の先輩でも中々側へは寄り附けない、從て吾々小身者は尙更近付ない程の偉いお方であつた。それであるのに何故私に宮内府に入れと仰しやるのか、それを今日考へて見ますと、私が其の當時洋行の經歷があると云ふことが其の理由の一ではなかつたか、當時韓國の官吏になつて居られた人達、或は又統監府の官吏になつて居られた人達でも、上の方の局長とか總長とかいふ二、三の人達は別として若い者にはまだ洋行する機會がなかつた、隨て洋行した人は餘りなかつた譯であります。其の點私は多少恵まれて居り既に洋行して居つた、所謂外國の空氣を吸つた人間であつたのであります。詰り伊藤公は苟くも世の中の役に立つには世界を知らなければ物にならないといふ風な感じを有たれて居つたのではないか、無論之は私の妄斷でありまして、間違つてゐるかも知

れませぬが、兎に角さういふことが一つと、更に私が全南の財務官をして居りました時に、或る問題に就て意見を出したことがありました。私は言ふ迄もなく海軍を罷め早稻田に學んだもので、志天下に在り、官吏志願で高文試験を受けて役人になつたものではない。興亞の一着手として韓國の施政改善に參與する目的で役人となつたのでありますから、實は中々鼻息も荒く、役人をして居つても何時でも罷める腹であつた、自分の抱負が行へなければ何時でも御免を蒙むる積りであります。

全南は由來難治の郷でありました。土地は富み人は鋭く、それに高麗朝滅亡の際に李朝は其の遺臣の多くを全南の各地に流謫した。其の遺臣が代々相承けて地方の實權を握り、所謂吏屬と稱するものが二萬人に及び、各郡に蟠居して居りました。又中央より派遣の郡守は莫大の金を上司に賄賂して其の他位を得たる様な次第で、搾取一點張りであつた。其の上に、此の方面は日本の威力を示すチャンスがなかつた、否却つて征韓の役では我が海軍は李舜臣に敗れた歴史を有つて居るといふ様な譯で、内外の事情は頗る難治に導いた。そこで私の赴任直後に關稅制度の改革は内務行政より度支部への移管となり、歴代相傳の徵稅事務を彼等の手より奪ふので

ありますから、彼等から相當な反抗を受けるのは當然でありました。全南は二十二郡あり、此の廣大な地域を僅に憲兵が五六名と警官十四五名で治安を維持せねばならぬ。其の上に光州に在つた一中隊の兵が全州に引揚げた直後でありましたので、私は目賀田さんに對して、是では迎もいけない、警官が僅か十四五名、憲兵が五六名位では迎も職務を遂行することは出来ない、當分全州より再駐せしめられたいと申請しました所が、それは軍隊の教練上出来ないが、暴動でも起つたら何時でも手を籍すといふことでありましたので、徒手空拳命がけで税務の引繼をやつたのでありますが、私は此の時に目賀田さんに對して意見を出した。どうも改革をやるのはよいが、あの五百年來代々税務の實權を握つて居る吏屬の手から根こそぎ取つてしまふことは、角を矯めて牛を殺すの類で却て事をやり損ふ因であるから、全員罷免を止めて一郡に一人位づゝ残したらどうかといふ穩健な意見を出し、一方當時の鶴原總務長官を経て伊藤公にも意見を出したことを憶えて居ります。

更に此の事以外では前に申上げた市原さんの園遊會の日でありましたか、伊藤さん少々酒を召されて御疲れになり獨り室内の椅子にいゝ氣持になつて假睡されてゐた。そこでお目覺めを

待つて私は伊藤さんの傍へ寄つて、——先刻も申しましたやうに、伊藤さんの傍へは吾々奏任級の者では寄り附けない、御機嫌の悪い時には黙禮して歸つてしまふと云ふやうな始末でありましたが、そこは私浪人上りですから遠慮なく伊藤さんの所へ酒を飲みに行きました。さうすると伊藤さんは私の顔を見るなり「ア、法螺吹きが來た、法螺吹き一杯飲まんか」といふので、お付き合をして暫くして居る間に、伊藤さんは一人で庭から舍宅の一室に入つてうたゝ寢をされた。こくり／＼とやつて居られる。そこで私は一つ伊藤さんと話をしやうと思つて、其の寢て居られる傍へ行つて坐つて居ると、嚙て眼をあけられて「何しに來た」と言はれましたので、實は先刻のロード・クローマーの話のことに付ては斯う／＼ですといふことを話しますると、伊藤公は明日來いと言はれた。そこで私は其の翌日伊藤公の官邸へ出掛けることになつた譯であります。恰度あの官邸の二階の所——私は先日南總督に招ばれて食後二階に案内された際、此の室が伊藤公の始終讀書され接客された所であると申したのでありますが、あすここに伊藤さんは始終居られてよく本を読んで居られました。そしてあすは今でも昔の儘残つて居りますが、其の室で引見されました。さうすると長いテーブルの上に私の書いた本が乗つて

居る、私が中央亞細亞旅行記を出版したのは明治三十六年でしたが、此の時は儲か明治三十九年の頃でした。勿論伊藤さんは其の本を読まれたか讀まれなかつたかは分りませぬが、兎に角其の本が机の上に乗つて居る。そしてそれを見て私を法螺吹きだと言はれたのかも存じませぬ——私は別に法螺を吹いた覚えはありませぬが、兎に角伊藤さんに法螺吹きだと言はれた。それで其の時に夙に韓國經營の資料としてロート・ミルナー著『埃及に於ける英國』を翻譯して公にしてゐましたから、其の本を伊藤公に献上しました。そして本を書く位でありますから幾らか埃及のことを知つて居りますので、埃及の話をして公と意見を交換したことを憶えて居ります。

それから明治四十年の七月に休暇を得内地に歸りましていろ／＼な人に會ひましたが、其の時でのことでも忘れませぬことは、渡邊千冬子のお父さんの渡邊國武さんから『貴様朝鮮の役人になつたのか』『さうです』『それはいゝことをした、實は俺は二十七歳の時に大久保侯から拔擢されて高知縣の縣令に引張り出された、當時の高知縣の情勢は板垣退助伯の影響で民權論が擡頭して地方官として一番面倒な所だつた、そこへ行けと言はれた。それで自分はま

るでまだ書生上りでありますから、あんな所へ行つても到底仕事は出来ませぬと言ふと、大久保侯は、貴様書生だから行けと言ふのだとのことで、自分は欣然として挺身高知縣へ行つた、決死の覺悟であつた。君が今度韓國の經營に参加するといふことは、君の志を伸ばす好い機會である、ウンとやつたらよからう』斯んな事を言はれたことを憶えて居ります。

話が少し横に外れましたが、休暇を終へて七月末に全南に歸りますと、間もなく目賀田さんから電報が來ました。何でも八月の三、四日頃でした。當時は時々京城で財務官會議をやつて居つたものですから、其の時も財務官會議の召集だなどと思つて水路上京の途に上りましたが、途中木浦から群山へと行つても誰も乗つて來ない、所が仁川に著くと目賀田さんが今日しも東京へ歸る所だといふことを聞かされた。私は目賀田さんから呼ばれたのでありますが、其の目賀田さんが今朝の何時何分の汽車で出發されたといふ——恰度税關の官吏が船にやつて來まして、このランチで直ぐ行つたら間に合ふだらうといふので、税關のランチに乗せて貰つて直に上陸、永登浦で目賀田さんの列車に乗り込み水原まで同車して目賀田さんにお目に掛り話を聞いたのであります。其の時の目賀田さんのお話には『君は度支部でもう少し仕事をさしてやりた

かつた、君も亦仕事をしたかつたらう、けれどもまだ十分に君の腕を揮はせるだけの仕事を與へなかつたが、實は伊藤さんが君を宮内府の方に入れたらといふお話がある、君が宮内府に入ることに同意ならば入り給へ、又自分の所に居らうと思つたならば居つても宜しい、去就は君の意思に任せる』斯ういふことでありました。

そこで私は水原で目賀田さんに別れ、その模範場長本田幸介博士、此の人は私の先輩として尊敬して居た人で、此の人ならば打割つて話をしても宜い人であると思ひましたので、私のやうな人間に宮内府のお役人になれといふ話があるのだが、どうだらうかと相談をしますと、やれ／＼と言つて賛成して呉れた。それから更に京城に來まして、今でも健在の俵孫一さんが農商工部の書記官をして居られましたので、私は同氏とも相當懇意な仲でありましたから——今日でも相變らず懇意に願つて居りますが——此の俵さんとそれから總長の木内さん、此の二人にも相談しました所が、何れも受けるが／＼と言つて賛成して呉れました。そこで大體私の肚は決まつた譯でありましたが、總務長官の鶴原さんが宮内次官に任命されて居られ、其の鶴原さんにはまだ充分の面識もなかつた譯でありますが、鶴原さんの所へ行つて『私のやうな海

軍上りの荒武者が宮内府のやうな上品なお役所に入つてよいのですか』と申しますと、鶴原さんは『實は伏魔殿の掃除をするのだ、一二年掛ければ掃除は出来る、掃除が済んだら何處へ行つてもよい、何處へでもやつてやる』斯ういふお話でありました。そして其の翌日は鶴原さんに連れられて初めて内閣に行きましたが、其の時には時の官内大臣李允用、總理大臣李完用初め韓國內閣の諸公が全部居りました。そして流石はえらいもので鶴原さんは一方に於て總務長官で統監代理（伊藤公が上京不在中の爲め）であり、他方に於ては宮内府次官であります。ですから總理大官初め、皆な向ふから足を運んで手を握りに來る。さうして鶴原さんは李宮相に對し、自分は多忙の爲め一週間に一遍位しか宮中には來れないから、此處に居る井上といふ者を自分の代理にするから萬事指圖して貰ひたいといふやうな話でありました。それが慥か八月の十日頃、或は十二、三日頃かと思ひますが、それから愈々宮中肅清、官制改革に取掛かることになつた譯であります。

## 五

宮内府の改革に關して今日伊藤公に關連のある問題だけをビツクアツプして見ますと、それは無論いろ／＼ありますけれども、公は漸を追うて改革の歩を進められた譯であります。私は本官になる前は度支部の役員として、宮内府囑託と云ふ名義で事に當つたのであります。其の間は明治四十年八月から十一月までの三ヶ月でありましたが、何しろ若い時分のことでありますから統監府や韓國側の邦人官吏を擢用しましたけれども、新聞記者や其の他各方面の人物を入れたのであります。さうして晝夜兼行して改革案を作るべく徹夜して働いたこともありますゆつくり寝て居つては仕事が捗らない、午前の二時三時は勿論のこと夜明けまで續けたことも幾度かありました。文字通りの晝夜兼行で、睡魔に襲はれると一杯引つ掛け又は相撲を取つて元氣を付けるといふやうなことをやりまして、僅か一月の中に二十有餘の官衙に亘り、七千有餘に上る官吏、雜役の實際を検討し、その中から四千七百人ばかり整理し、官衙を十三か十四に減じたのでありますが、其の整理をするに付ても重なる者は、その系統から所謂學閥の系統から又は財閥關係、閥閥關係、過去に於ける履歷といふやうなものまでもスツカリ調べ上げてしまつたのであります。そして改革案を僅か一月足らずの中に作り上げた譯でありますが、

それから聽て十月に伊藤公が歸られ、又鶴原總務長官が辭められた、そして後に大變宮中に功勞のありました小宮さんが大審院の檢事から次官になつて來られ、さうして私共の改革案を更に再検討されて十一月に發表したのでありますが、最初の案が其の骨子となつたのであります。此の時に吾々の作りました案は、何と申しませうか、相當公平なものを作つた積りであります。だが、韓人側から見たらさうでもなかつたと見えていろ／＼註文も出たのでありますけれども、併し伊藤公はさういふ點は中々偉い。李允用が何と言はうが誰が何と言はうが、日本人の進退は俺が決する、君等は心配するな、其の代り韓人側のことは君達で宜しくやり給へといふやうなことで、私等の最初の人事は相當徹底的でありましたけれども、それが餘程緩和されまして、見た所では生ぬるいやうな感じもあつたやうであります。兎に角七千人からの者を四千七百人も淘汰し、之が爲め約七十萬圓位の退職賜金を使つたのであります。申す迄もなく宮中は五百年に亘る永い因縁があつたに拘らず、何等の動搖もなく平穩裡に斷行されたことは伊藤公の並々ならぬ御苦心に依るのであります。

宮中の肅清、改革と申しても多岐多端でありまして一言にしては盡くせませんが、老練達識

の伊藤公は、韓皇家の病根を明快に診断して漸次に適切な療法を施されたのであります。冗員の淘汰、享祀の釐正、宮居の移轉、王家の安泰を計る諸施設、次から次へと改善され、大膳の御物、醫療の改良に迄手を着けられ、遂に韓國の宮廷は申す迄もなく、一般をして安心せしめるに至つた。後に小宮さんは克く伊藤公の意を體し植物園とか動物園とかを設け、博物館を造り、運動場までも拵へて保健衛生に力め、宮廷の人達をしてその生活を安んぜしむるやうな方法を執られたのであります。

更に他面一番むづかしかつたことは宮室財産の處理と負債の整理でありました。其の時の負債は約千七百萬圓位あつたと思ひますが、之を整理し、又財産の處分は臨時帝室及び國有財産調査局に依つて調査され、私はその専任委員になつて、相當苦しい立場に立つたのであります。即ち宮内府の役人として宮廷の財産を擧げて政府に委讓させねばならぬ、詰り内から改革を進める役割りで中々困難な事であつた。然し改革の熱意に燃へ伊藤公の方針に従ひ、宮廷の財産及慶善宮の財産を擧げて國有に移すこととなつたのであります。それと同時に宮内府の中に臨時帝室財産整理局といふものが出来まして、早速移讓後の整理に當つたのであります。而

して最初の中は相當忙しかつたのでありますけれども、段々時が経つに従ひまして仕事も進んで、後になつては非常に閑散になつた。それで鶴原さんの言はれました通り、私は宮中に三年居りましたけれども、明治四十二年の終り頃には役所で毎日欠伸をしなければならぬやうになつたのであります。

私は斯くして明治四十三年の春、官を辭して世界各國視察の途に上り、翌四十四年春に歸朝したのですが、時の總督寺内伯に報告した一節に宮中席次に就て申し上げたことでありましたが、それはチユニスでは高等官二等位の駐在官がサルタンと並んで同じ様な椅子に坐つて居る私は其の前に出て拜謁した。ジャヴァのジョクジャでもサルタンの玉座に隣つて和蘭の理事官の椅子があつた。然るに韓國の場合、伊藤公の如き 天皇の名代として來られ後には太子大傅として殿下の稱號を與へられてゐたお方であるに拘らず、宮中の宴席などでも、皇帝は勿論上座であります。各皇族の下に伊藤公はお坐りになり、非常に尊敬の念を以て對せられたといふことは、中々に思慮のあつたことと思はれるのであります。吾々として一意韓國の爲めに働くべく指導されたことが各方面に徹底して居たやうに思ひます。

## 六

先づさういふ譯で段々改革も進んで参りまして、明治四十一年になつて伊藤公は初めて韓帝の南北巡幸のことを申出られ、皇帝を御案内申して四十一年の正月先づ京城から馬山浦まで行かれ、更に北方は京城から義州まで行かれたのであります。私は巡幸の事務總長のやうな仕事をして我が宮内省との親電の往復や巡幸一切の庶務をやらねばならぬ立場に居りました。此の間も大邱で朴重陽參議に會ひまして昔話をしたことでありましたが「俺が君と初めて會つたのは君が韓帝のお伴をして大邱に來た時だつたな」と申してよく覺へてゐました。それで當時いろいろの噂が立ちまして、釜山の沖に日本の聯合艦隊が來て居る、それに韓國の皇帝を御乗せして日本に御連れ申して行きさうだなど、無稽の風評を立つるものがあり、そして中には鐵道線路に横になつて、萬一皇帝が日本に行かれるようであると吾々は死を以て之を諫めなければならぬなど、説く者もあつたそうであります。併し斯る噂も間もなく消へ、釜山を経て馬山浦ではとうとう旗艦生駒に行幸さるゝことゝなりました。時の艦隊司令長官は誰であつたか忘れま

したが、參謀長は財部さんであつたと記憶します。

そこで愈々皇帝が生駒に行幸され艦上で午餐が開かれましたが、其の時に伊藤公は皇帝に對して話をされたことを今以て憶えて居る。即ち「あなたの御國は現在千五六百萬元位しか一年の歳入がない。此の軍艦一つ造るには矢張り千五六百萬元を要するのである。而も斯ういふ軍艦は日本には澤山ある。我が國は維新後 大帝の御稜威の下に次第に發展し、富強の一路を辿つて居る。あなたの御國も吾々の忠言を容れて着々施政の改善、産業の發展に力を盡されるならば必ず富強になる。さうして斯ういふ軍艦も出来るやうになるではありません。斯ういふことを言はれた。それから其の時に財部さんが御案内されまして、艦内あつちこつちを御覽になり、私も後から御供して行きましたが、其の時に機械裝置で大きな砲弾を上げ下げする所とか、尺餘の銅鐵板とかいろ／＼軍艦の設備を御見せされたのであります。

然し當時はまだ／＼皇風が普ねく八道の民心に徹底して居りませぬので、北韓巡幸の際我が國旗を破る者等も出ました。伊藤公も此等の狀況を見て日韓の融和は中々困難だといふ風に御考へになつたと思ひます。何れにしましても此の時は韓國の皇帝としては、御生涯初めて――

尤も明治四十年に水原に行かれました。水原に行かれたのが韓皇が初めて京城外にお出になつた時であります。兎に角韓國の皇帝としてはそれが御初めての盛儀であつたのであります。そして其の翌年にこの南北大巡幸となり、それに依つて日韓一家の實を示さんとされたのであります。併し一方に於ては之は申上げるも長多いことではありますが、今の李王垠殿下が御七歳位の御時であつたと思ひます。伊藤公がお伴されて内地に御留學になり、さうして我が皇室の非常な御手厚い、一視同仁といふよりもつと深い御いづくしみの御もてなしを受けさせられ、更に伊藤公の献身的な努力と相俟つて内鮮一心一體の根本が築かれて参りましたやうな次第であります。實際あの伊藤公の努力といふものは並大抵のものではなかつた、初めて王世子殿下をお連れ申さるゝ際などは、釜山から馬關への船中の如き、伊藤さんは眞夜中に起きられて殿下がよくお寝みになつて居られるかどうか屢々見に行かれたといふ、實に至れり盡せりの誠意の發露で、吾々としましては此の大先輩の努力苦心に對しましては、殆ど發するに言葉もない位に感激を禁じ難いものがあります。さういふ風な伊藤公の努力、扶桑權域一家春と謳はれたことが僅か三十年

の間に實現を見たといふことは、私共末輩の者に取りましても洵に感慨に堪へないものがあるのであります。

## 七

又、目賀田さんの事に付きましたは、私よりも長くお附合ひになつて居られました御方が此處に澤山居られますから、私から申し上げますことは聊か蛇足の憾みはございますけれども、併し此の度朝鮮へ行つて見ましても、矢張り目賀田さんはお偉かつた、斯ういふ言葉が到る處で聞かれたのであります。私も之を聞く度毎に洵に嬉しく感ぜさせられました。私は京城や平壤で主だつた方とお會ひした時に偶々目賀田さんのお話が出まして、非常に達見のある方で僅か三年しか居られなかつたが、將來の韓國經營の輪廓を築いた人であると言ふ人が相當あつたのであります。之に對しましても私は非常に氣持よく感じた譯であります。私は先刻申上げましたやうに、特別任用で任官したのであります。即ち外務省の推薦で韓國政府の顧問部に入つたのであります。目賀田さんとは深い面識もなかつたのであります。而して僅か二年ばか



りの間ではありましたが、目賀田さんの私共に對するやり方と申しますか、それを今日考へて見るに付けまして、何故昔はあんな偉い人が居たのかなといふ感を深くせざるを得ないのであります。無論創業の際でありましたから或はさういふことが出来たのかも知れませぬが、人を疑はず、人を信じて惑はず、始終私共の申す桁外れのことをも能く聽いて下さつたやうに思ふのであります。

私が一番初め役人になつて財政顧問部に出た時分には、日本人としては今は故人になりました鈴木穆君、久芳直介君外五六名しかゐりなかつた。財政顧問部以外では外交顧問のスティーンズ君、補佐官の沼野安太郎君、警務の丸山重俊君位のもので極めて少數であつた。私は當時高等官の待遇を受けて居つたのでありますが、高等官の食堂に出る者は常に五六人しかなかつた。斯くの如く私は顧問部員としても大分古い方であると思ひますが、私は任官して毎日定刻に登廳しましたが、目賀田さんは何も私に言ひ付けない、時々大きな眼をむいでのつそり／＼巡つて來られますけれども、最初二十日間ばかりは何も言ひ付けられない。そこで役人といふやつは馬鹿に呑氣なものだ、こんな閑なものか知らと思つて居つたのであります。すると二十

日ばかり経つてから慶尙南道、全羅南道方面には魚が澤山獲れるさうであるが、其の漁業政策を立案したいと思ふから、貴様やつて見ると言はれた。まるで藪から棒です。漁業政策と言つても私には何等の豫備智識がない、書生上りの私にそんなことが解らう筈がない。然し何でもよいからといふわけで、馬力を掛けて、彼此れ二十日ばかりの間に千枚に上る長篇の意見を書いた。いろ／＼な資料を引張り出して千枚ばかりのものを書いて目賀田さんに出しますと、目賀田さん其の當時笑つて居られました。こんなものは五六枚でよかつたのでせうが、然し何でも多い方がよいと思つて澤山書いて出した。之が目賀田さんの私に對する初めての指令でありました。

其の年の十月に財務監察官と云ふ名目で全南に出張し、歸つて間もなく重なる道觀察府に地方顧問部を置くことになり、私は水原の財務官に左遷された——其の時には之を皆左遷と見て居つた——そこでは警務顧問部が先で觀察府内の小さい温泉室に看板を懸けてやつて居つた。併し私は考へた、吾々の任務は京畿道三府廿九郡の財務を監督し所謂牧民の事に與かるのであつて、觀察使の良き顧問でなければならぬ、それには地位も同等でなければならぬ、役所の如

きも小さな附屬建物ではないかん、觀察使の政務を執る宣政堂に入り込むか、それでなければ大きい所に事務所を作るかしなければならぬ。所が當時度支部は非常に貧乏でありまして、一ヶ所の修理費は三百圓か五百圓以内にして貰ひたいと云ふ内達であつたが、そんなことには頓着なく、今は御承知の通り稅務署か郡役所になつて居りますが、觀察府のこつち側の所に百五十坪あるか二百坪あるか分りませぬが、立派な堂があつた。此堂は何か申して皇帝が水原に幸せられた時には御休憩になる所であるが、それが空いてゐるから、之を繕ふことにしろといふので、度支部の技師に来て貰つて調べて見ますと、それには七千五百圓位掛かるといふことである。前に申した通り一ヶ所の事務所の修繕は三百圓か五百圓であつたが、それではどうしてもしかん、七千五百圓出して貰はなければ事務が執れない、是非出して貰ひたいと申出ますと目賀田さんはそれを黙つて出されました。所がそれでは韓人側が治まらない、觀察使は李根洪といふ李根澤一族の相當な人でありましたが、それが内務大臣に上申をし、井上財務官が宮中の重地を占居せんとしてゐる、速かに度支部大臣に移牒して撤去せしめて貰ひたい、此處は皇帝御巡幸の際にのみ使用さるゝ聖地であるからといふことを申出しました。勿論度支部大臣にまで

其の事が届いたに違ひありませんが、目賀田さんは黙殺されたのでしやう、私は着々修繕し工成つて其處に入り込みましたが、上官の斯ういふ措置は吾々若い者を感激せしむるに十分でありました。無論之は何と言つても目賀田さんが居られた爲に實行出來た譯でありまして、私は今日でも目賀田さんを讃へることの一つとして居るのであります。

それから又御承知の通り、あの水原のステーションから城内に達する道路、日本で言へば國道では勿論なく、縣道にも値しない郡道と言つてもよい地方道路でありますが、之を良くしなければならぬ、斯う考へたのであります。それが爲には實はあの通路は丘を廻り曲げて作れば安くてよいのかも知れませぬが、あの丘を突抜けて眞つ直ぐに直線道路とする計畫を樹てた。それが爲に相當金が掛つた譯でありますが、目賀田さんは黙つてその半額を國庫から補助して下さいまして、あとの半額は、私は父老會を作り其の父老會が主唱して釀金せしめて道路を作りました。それで新韓國で初めての郡守會議を水原でやりました時に、私は參會の郡守達に申しました。「あなた方は今此處にお出になる時に新に出來た眞直ぐな道をお通りになつたでせう。私は日本人であるが韓國の政治を改善する爲にお輔けに来て居るのである、悪いことはせぬ。

あなた方も悪いことをしてはいけない、悪いことをすれば免職させられる、又善いことを爲されば微力ながら其の功を上司に上申する。要するに悪は小と雖も之を爲す勿れ、善は小と雖も必ず之を爲せ、さうして政治は眞つ直ぐにやれ、實は之を如實に示すために眞つ直ぐな道路を作つたのである」といふやうなことを申したのであります。

それから私は水原には三十九年二月から九月迄半ヶ年の在任でしたが、其の間に目賀田さんの命を承け、政府倉庫を始め農銀とか手形組合等の産業開發施設に手を着け、道路計畫を立て同年十月更に轉任を命ぜられて全南光州に行つたのであります。此處でも亦私の居る所がない先着の警務顧問部などは矢張り小さい温突の中に入つて居りましたので、私は之では逆も政治は出来ぬといふので、觀察使は稅務監を兼任して居ることでもあり、今度は宣政堂に入り込みました。相當韓人側に不満もあつたやうでありますけれども仕方がない、觀察使の執務室に隣れる一室に入りましたが、其のうちに駐屯軍隊が引揚げたものでありますから、其の後へ引移りまして事務を執ることゝしました。斯く役所は出来ましたが私の住む舎宅がない。そこで之も韓國側の役人として地方では初めてだらうと思ひますが、城内に濟州島の馬を置く廣い空地

が不利用の儘に残つて居る、之に目を着けて其處に新築したいと思ひましたが、政府には新しく家を作るだけの金の出道がありません。仕方がありませんので農工銀行から金を借りて、和洋半々の官舎を作つたのであります、之も目賀田さんの部下の心を汲んでの機宜の裁斷であつたと存じます。

斯ういふことで、私は目賀田さんにはいろ／＼御厄介を掛けましたが、部下を信じて自由裁量を許されました。目賀田さんといふ人は輪廓が大きくて、人を信じて疑はないといふやり方でありました。又勿論私共としても信任されて居らなければ御免を蒙る、御無理御尤で妄従する必要はない、そんなことならこつちが御免を蒙ると云ふわけで、互に相信じ相倚ると云ふ風があつた。それだけにいろ／＼と無理をやつて貰へた譯でありましょう。之を要するに伊藤公目賀田さん、此の二人の大人物に仕へて愉快な思出を持つ私が、此の度久振りに半島へ参りまして、半島の最近に於ける非常な進歩發展の状況を見て大變喜んだのであります。

そこで話は又元へ戻りますが、此の度あちらへ参りまして何故自分が亞細亞を興すといふ考へを持つに至つたかといふこと、更に私と半島との因縁をも話せといふことでありましたから、總督府の食堂でありましたか、そこで話をした時にも申し上げたのでありますが、無論今日と當時とは相當時代も變つて居りますから、昔のやうには行かないけれども、併し氣持だけはそこになければならない。私は世界各國を幾度か歩いて見まして、内鮮の關係が今日の如く洵によく行つて居るといふことは是は當然の事でありませぬけれども、其の半面に於て伊藤公、目賀田男といふ様な偉い人々の力が大いに與つて居るものであるといふことを深く感ずるものがあります。

偕て今茲で臺灣と半島とを比較することは或は當を得て居らぬかも知れませぬが、私の觀る所に依りますれば、半島と臺灣とはいろ／＼の意味に於て違つて居る、之を一律に見ることは出来ない。それは例へば半島の今日あるを致しましたのは、一面に於て歴代の總督が長く其の任に居られたこと、齋藤さんの如きは前後十年近くもおゐでになり、宇垣さんの如きも七年近くに亘つて長く統治の大任に當られた。即ち此等の總督が併合の詔勅を奉じて、獻身的に努力

されたといふことが、今日の半島を造成した要因ではなからうかと思ふのであります。之に反して臺灣の方はどうかと申しますと、不幸にして——と言へば語弊があるかも知れませぬが、今後は兎に角、過去に於ては屢々總督が迭つて居ります。それで私は何と申しましても、あゝいふ所に於ては總督がどつしり腰を落着けて、そこに居るといふ心構へを有つといふことが必要なことではないかと思ふのであります。其の意味に於きまして、私は半島が臺灣に比して餘程恵まれて居るのではないかといふやうな感じが致すのであります。

そこで私は皆さんに一つ申上げて見たいと思ひますのは、或は之はお笑ひになるかも知れませぬが、併し今日は座談會のやうなものでありますから何でも申上げる譯であります。私は今日まで亞細亞を興すといふやうな考へを持つて四十年來其の事の爲に身を捧げて來た者としては、内鮮の關係が今日のやうになりましたことを非常に欣快とする者であります。それは唯半島がよく治まつて居るといふ事だけではない、私は初めから其の考へを有つて居つたのであります。兎に角今日意外にも早く一體一心の路を進みつゝありますことは、之こそ、日本が皇國日本の大使命に向つて進んで行ける一段階が出來たものであるといふ風に考へるのであり

ます。之は言ふ迄もないことでもありますけれども、島國の日本から大陸に伸びて行く上に於て半島の位地は極めて重大なものでありまして、此處がうまく治まらないやうであつては、どんなに大きなことを言つても、事の成就是極めて困難であると申さなければならぬのであります。

## 九

偕て今茲に翻つて今日の支那を見るならば如何でありますか。孫文が廣東より北京への最後の旅次、神戸に立寄りました時に、頭山滿翁始め私にまで電報を寄越しまして會ひたいといふことでありましたから、態々神戸へ行つて彼に會つたことがあります。其の時に滿洲問題に論及し、孫文は日支は將來どうしても提携して行かなければならぬといふことを言つて居りました。其の後彼は北京へ行つて間もなく亡くなりましたが、其の孫文の一部下である蔣介石が今日どうであるか、十年此の方抗日侮日に徹底し、然かも蘇聯を援いて遂に今日の不幸を見るに至つたことは、吾々の如き四十年一貫して日支の聯繫を唱へ來つたものとして寔にお恥かしい次第である。多年の苦心が何等酬ひらるゝ所がないといふ風にも思はれてならないのであります。

す。のみならず最近に至つて、印度の一部民心は段々日本に好くなくなつて參つて居るのであります。英國其の他の宣傳は兎に角、今日印度に於ても日本に對する誤解が相當募つて居るといふ有様であります。

更に驚くべきは埃及までも其の影響が及んで居ることあります。私が韓國を去つて世界殖民地を視察しました際、即ち明治四十三年冬アフリカ北部を経て埃及には二週間程も居りました。其の時はまだ獨立しない前でありましたが、ムスタファ・カメルといふ二十九歳の若さを以て死んだ男、此の男國民黨の創立者で、この國民黨が今日の埃及をあらしめた譯で日本で言へば板垣退助伯と云つたやうな人物に當ります。それで此の男の死後兄のハブキド・ペーといふ男が弟の後を繼ぎ國民黨の首領になつて居りましたが、英國は埃及に西洋科學を教ゆる大學を作ることを許さなかつた、隨て西洋式の大學はなく、唯だ一つ高等學校がありました。其の高等學校が埃及獨立の原動力になつた。私は其の學校のクラブで一週間寢食を共にした經驗を持つて居ますが、其の時分に驚いたことには、吉田松蔭先生の傳記をアラビヤ語に翻譯して之を學生に教へて居りました。日本の維新は何故起つたか、其の原動力は誰にあつたかといふこ

とを検討して居つた。即ち日本を自國の手本にしようとして居つたのでありますが、其の埃及が、日本は亞細亞を興すといふ考へを有つて偉大なる使命の下に邁進して居るに拘らず、却つて今日反日の情勢にあるといふことは皆様之を何と御考へになりますか。更にベルシヤにもさういふ風が吹き、シヤムの一部までもさういふ風が吹く、シヤムには支那人が三百萬も居り、それ等の支那人が日本に對して反感を有つのは或は解つた話かも知れませぬが、併し其のシヤムに於ける印度人までも反感を有つて居るとかいふ噂があります。更に蘭領印度、此處なども支那人が多いのでありますから反感を有つものゝ一部にあることは首肯せらるゝ次第です。

要するに亞細亞を興すべく聖戰に立つて居る日本の相手方支那が、假りに其の半分が防共親日になつた所が、他の半分は中々である。御承知の通り、支那の民心を日本に歸向せしめるといふことは容易ならぬことでもあります。隨て洵に前途遼遠の感を以て覺悟を定めなければならぬのであります。是に於てどうしも問題となりますことは、申す迄もなく半島と内地の一體一心であります。半島二千三百萬の人達と七千萬の吾々内地人とが一緒になつて、眞に内鮮一體となつて進んで行かなければならぬ。即ち此の半島と内地とが本當に一身一體、一家の如く

なつて進んで行くことが、今日の日本の大使命を果す基礎になる所以であると思ふのであります。私は先年滿洲に行つた時に、時の軍司令官と話をしました際に、同司令官は私に對していろ／＼打開けて話をされた中に、「どうも井上君、日本人といふものは他國の人心を捉へることは餘り上手とは言へないではないか」こんなことを言はれたことを憶えて居ります。實際是は中々むづかしいことである。之に對して半島は内地とは同根同種であつて、夙に合併すべきものが機熟して合併となつたのである。勿論其の半面には伊藤公以來歴代總督、更にそれに附いて居る人々が本當に其の氣持で萬端に當られたればこそ、初めて今日の狀況を見るに至つたのでありますけれども、一層進んで一心一體になりきらねばならぬのであります。

## 10

そこで私は此の際中央朝鮮協會の皆様方に御希望を申し上げたいのは、此の本當の内鮮一家の氣持が長く続き、遂には宇垣總督も言はれ、南總督も言はれる通り、内鮮一致といふことは最早や言ふだけ野暮である、水臭い。是は歴代の總督が皆さう仰しやるのであります、實際そ

ここまで行かなければ嘘である。而してそれが爲には本當に心から半島人を愛し、半島人を援け  
るといふ境地に立つてやる必要があるか、是が出来なければ、支那問題の解決などい  
ふことも容易に出来ないと思ひます。私は支那問題に付ても、いろ／＼先輩或は友人の意見  
などを聞いて居りますが、何れにしましても、此の問題——正當且つ最終的の解決は前途遼遠で  
あります。而して何よりも眞づ先に内鮮の心からなる融和——今更こんなことを申上げるのも  
野暮な話であります——どんな誘惑にも迷はないで、本當に一つになるといふことにならな  
ければならない。之に向つて吾々本腰になつて進んで行かなければならぬ。即ち此の意味から  
言ふならば、此の中央朝鮮協會の任務こそ洵に重大なものではなからうか。滿洲問題が起つた  
支那問題が起つた、もう朝鮮の方は済んだといふやうな考へ方は間違つて居るのではないか、  
遠きを慮れば先づ近きを片付けなければならぬ。私は斯様な考へを有つて居る者であつて、  
今日此處に参りまして、伊藤公なり目賀田さんなりの御話を中心と致しまして雑談を申上げま  
した所以のものも、精神は茲にあるといふことを皆様に御諒承戴きたいと思ふのであります。  
最後に一言申上げて置きたいと思ひますが——尤も私がこんなことを申上げますと、或は皆

さんお笑ひになるかも知れませぬが、是は一つ野人の言としてお聞きを願ひたいのであります  
と申しますのは或はそんなことは出来ないかも知れませぬが、あの平壤の要衝の地を相して、  
我が離宮と申しませうか御用邸の一つ位出来るやうにお互に考へて見たら如何ですか。無論之  
は其の筋の人々のお考へに依ることでありまして、吾々平民の兎や角申すべき筋合のものでは  
ございませんでせうが、併しあの邊りに御用邸の一つ位あつてよいのではないでせうか。而し  
て其の結果人心にどういふ感じを與へるでありませうか。私は茲に之を一つの宿題として申上  
げる譯であります、若しさういふことが出来るならば、如何に吾々大陸政策實行の上に大き  
な影響を持ち來すものであらうか、そこに實行への一段階が築き上げられるのではなからうか  
斯様に私は考へて居るのであります。

今一つは之は無論歴代の總督初め關係者間に於ては常に考へられ實行されて居る所でありま  
せうが、私今日まで世界各國を歩いて見まして最も痛切に感じさせられますことは、所謂日本  
の交通機關の劣れるといふことであります。日本では産業教育其の他の方面のことは世界各國  
に比して進歩發達を見て居るやうであります、併しながら産業方面は申すに及ばず、有ゆる

部門の進歩發展を促す所の基本たるべき交通機關——それは鐵道と言はず、自動車道と言はず何處の國のそれにも優れりとは申されぬ。日本内地に付て見てもさうであるが、半島のあの釜山から新義州へ行く大道の如き巾を廣くして全部ベープとしてはどうか、金がないからと言はれるかも知れませぬが、併し金がなくても伊太利や獨逸なんかではどん／＼やつて居る。歐米は固より各國の植民地を歩いて見ても、日本のやうな道路の貧弱な所はありません。何と言つても半島は日本に取つて大陸への橋渡しになつて居る譯でありますから、今少しく道路交通に力を注ぐべきではなからうかといふ感じを有つて居る者であります。産業其他萬々の事は申上げるまでもなく、特に教育の事に付きましたは、皆様御承知の通り此の四月一日から内鮮共學となり、總督府に於かれても非常に熱心にやつて居られるやうでありますから、是は十分に期待出来ると思ひますが、唯私は只今申上げました二つの點だけを宿題として皆様にお話申上げた次第であります。若し是が問題にならなければ、其の儘にお聴き取り願へば結構であります。長い間の御靜聽を感謝致します。(拍手)

昭和十三年六月二十日印刷  
昭和十三年六月廿三日發行

(非賣品)

編輯兼發行人 中島 司  
東京市品川區北品川三ノ三一九  
印刷人 吉岡清次  
東京市豊町區有樂町二ノ七

發行所 東京市丸ノ内仲通十二號館六號  
中央朝鮮協會

(電話丸ノ内一六三四番)



終

15  
3